地形氣候小氣候と生態氣候に就て

八 木 誠 政

(東京文理科大學)

On the Topographical, Micro-and Ecological Climate

Masatosi Yagi

從來本邦に在ては大氣候(Macro-climate)は其の基地帶の生物とは關係なきものゝ如くにして取扱れて來た。然乍地形氣候(Topographical climate)に於ては、其の區域が生物の存在しない沙漠か不毛地帶でない限り左様な取扱はなし得ないのである。小氣候(Micro-climate)に至つては一層然りである。我が國に於ては此の小氣候が色々な區域に對して用ひられて居り其れが地形氣候の小部分と云ふ意である場合があり、又生態氣候内の小氣候である場合があつたりするのである。

大氣候、地形氣候及小氣候は地域の大小形態に依つて區劃された氣界内の氣候であるから一連の上にある可き學語であるが、其の中の小氣候は言葉の感じから、用ひる人に依り適宜に利用され易い傾向がある。生物を對象としない場合の小氣候は何れの小空間に其れが用ひられ様とも問題とならぬのであるが、其れが一度生物群を對象として用ひられる場合には生態的單位の空間に對して用ひられる方が合理的であると思ふのである。

其處で小氣候を生物群を對象とする場合に如何様に取扱ふ可きかは、生態學に於ける群團の分類を考慮すべきであると考へる。

地球上に於ける生物群は種類が異なるに従ひ其の占める地域も廣狹様々である。此の種類及其

の占める地域は其れを包む一般氣候に依つて支配され、又地形氣候等もあづかつて來るものであるが、斯くして一度形成された生物群は逆に生態氣候を形成して一般氣候に影響を與へる。此の様に循環作用のある可きは自然の成り行である。生物群が大なる區域に一樣に發達する時は、大氣候を支配する様になるのも當然のことである。大氣候を左右する生物群の生態氣候はしばらく論外に置き、吾々は小氣候の對象となる生物群に就て記し、將來農業氣象を論ずるに當り用語の正確を期して行き度いと思ふ。

生態學に於ては生物群が一定の大きさに發達したものに對し極相(Climax 又は Formation)と名附ける。此の群の中には數個の異なる優勢種を含んだ群團があるのである。其の各々の群團を單位群(Association)と云ふ。之等の同じ單位群に於ても、其等の個々體の占める局部の氣候或は地理的な差によつて多少異なる群を生ずる。之を異相群(Faciation)と云ふ。此の異相群の内にも更に地形的、地質的或は露出の差等によつて多少異なる群を形成する。之を局相群(Lociation)と云ふ。

即ち吾々は同一生物種の形成する群内に於て群團的に異なる生態氣候を有する様になる。

上の群とは少しく趣を異にする群團がある。其れは同程度に優勢な生物種が同一地域内に

存在するものである。此の群に対しては群落 (Society) と名附ける。此の群落に於ても優勢種が季節的に異つて現れる場合を季節群落 (Seasonation) と稱し、又同じ群落内に在つて優位を占める空間が層位的に異なる群落を層位群落 (Lamination) と云ふ。

最後に生物群としては最も簡単な様相を示すもので単一な種類が一塊となつて居る群相を叢 (Clan) と云ふ。

吾々は生物群を對照して小氣候を問題とする場合は、以上の如き群團が占める空間に就て區劃を限定したいのである。即ち之れを次の如く要約する。

生系氣候 (Formation Climate 又は Biome Climate)

單位群氣候 (Association Climate)

異相群小氣候 (Faciation Micro-Climate)

局相群小氣候 (Location Micro-Climate)

群落氣候 (Society Climate)

季節群落小氣候 (Seasonation Micro-Climate)

層位群落小氣候 (Lamin Micro-Climate)

叢小氣候 (Clan Micro-Climate)

上は Clements 氏の生態群の分類を基礎とする學語に氣候分類を添加したものである。要するに小氣候は生物を包含する場合、生態單位の占める空間の氣候を對象として行き度いと思ふのである。

又生物を包含する地形氣候を論ずる場合は其の區域内に於ける生物群の生態氣候を對象としたいのである。